わが心の浜松

昭和33年

市民の総意でつくった城

浜松城天守閣の再建

若き日の徳川家康が築いた浜松城。しかし、その天守閣はいつしか失われ、戦後間もないころまで天主台の石垣だけが残っている状態でした。

「そんな幻の天守閣を再建しようという機運が昭和30年（1955年）から盛り上がりました。当時の岩崎豊市長、大林稔・浜松市議会議長が中心になって、再建計画が動き始めたと記憶しています」。そう語るのは、当時、浜松市教育委員会社会教育課の職員だった鈴木眞一さんです。

「しかし、あのころの市は現在と同様に財政難。再建のための資金集めがまず難題でした。そこで、市民から目標1000万円の寄付を募ることになり、お城をかたどった陶製の募金箱をおよそ2000個つくって、市内各所に置いたのです」。鈴木さんは、市内のタバコ屋さんや小・中学校などに「募金箱を置かせてください」と頭を下げて回ったといいます。

ただ、問題は資金だけではありません。天守閣を再建しようにも具体的な設計図はおろか、参考になる絵図すらなかったのです。そこで、名古屋工業大学の城戸博士という専門家の協力を得て、三層・延べ330平方メートルの天守閣設計プランができました。

こうして難題をクリアし、待望の天守閣落成式が行われたのは昭和33年（1958年）4月。市民から集まった資金はおよそ800万円と、目標には届きませんでしたが、市の予算を加えた総工費1128万円をかけて、天守閣は無事完成したのです。

天守閣の完成後、鈴木さんたち社会教育課の職員は、寄付をしてくれた市民の家々を回り、お礼に城を描いた大・中・小の絵皿をプレゼントしました。今もし、この絵皿が残っていれば「お宝」として高く評価されるかもしれません。

「浜松城天守閣は、広く市民の浄財を集め、市民の総意と願いによって再建されたもの。現在の若い市民の皆さんに『みんながつくった浜松城』という認識をもってもらえれば、再建にかかわった者として大変うれしく思います」と、鈴木さんはしみじみした口調で語ってくれました。

再建直後の浜松城天守閣